

# グッド・ソサエティ論と第三の道

—エツィオーニ説の検討—

福 田 敏 浩

## I.はじめに

アメリカの政治評論家であったリップマン (W.Lippmann) は1937年に“*The Good Society*” (London) を出版し、その中でレッセ・フェール体制でもなく、集産主義でもない第三の道を提示した。私有、競争市場経済および国家の法による市場経済の誘導を基幹とする政治経済システムである<sup>1)</sup>。それは、レッセ・フェール体制が崩壊に瀕し、左右の集産主義 (共産主義、ファシズム、ナチズム) の脅威が日増しに高まる中で大恐慌に苦しめられていた1930年代のアメリカにおける政治面および経済面の窮状を打開すべく提出された改革案であった。

グッド・ソサエティ (わが国では「善い社会」, 「善き社会」, 「よい社会」と訳されている) に関する社会思想は古くからある<sup>2)</sup>が、筆者の拠って立つ社会経済システム論の角度から振り返って見ると、リップマン説はこの方面の説としてはもともと早い時期のものと言えるであろう。内容的にもリアリティに富んでおり、現実離れしたユートピア論とは一線を画している。

筆者の知る限りグッド・ソサエティに関する書物はそれほど多くはない。しかも比較的目につくようになったのは1990年代以降である。誤解を恐れず思い切っ  
て言えば1937年のリップマン説以後半世紀の空白があったことになる。筆者が

1) リップマン説については福田 [12] を参照されたい。

2) たとえばパーカー (J.Parker) は社会思想史の視点をもって19世紀および20世紀のイギリスにおけるグッド・ソサエティ論の系譜を概観し、その中で19世紀については R.Owen (1771-1858), J.Ruskin (1819-1900), T.H.Green (1836-1882), S.Barnett (1844-1913), A.Toynbee (1852-1883) らの説を検討している。Parker [18]

目を通した外国語の著書は次の通りである<sup>3)</sup>（出版年順）。

1. Bellah, R.N., et al., *The Good Society*, New York, 1991（中村圭志訳『善い社会—道徳的エコロジーの制度論』みすず書房，2000年）。
2. Etzioni, A., *The Golden Rule: Community and Morality in Democratic Society*, 1996（永安幸正監訳『新しい黄金律』麗澤大学出版会，2001年）。
3. Galbraith, J.K., *The Good Society, The Humane Agenda*, New York, 1996（堺屋太一監訳『よい世の中』日本能率協会マネジメントセンター，1998年）。
4. Giddens, A., *The Third Way, The Renewal of Social Democracy*, London, 1998（佐和隆光訳『第三の道—効率と公正の新たな同盟』日本経済新聞社1999年）。
5. Parker, J., *Citizenship, Work and Welfare, Searching for the Good Society*, London, 1998.
6. Berliner, J.S., *The Economics of the Good Society*, London, 1999.
7. Giddens, A., *The Third Way and its Critics*, Cambridge, 2000.
8. Etzioni, A., *The Third Way to a Good Society*, London, 2000.
9. Greve, B. (ed.), *What Constitutes a Good Society?*, New York, 2000.
10. Etzioni, A., *Next: The Road to the Good Society*, New York, 2001（小林正弥監訳『ネクスト—善き社会への道』麗澤大学出版会，2005年）。

筆者はこれまで社会経済システム論の立場から第三の道論を検討してきたが、その過程で分かったことは第三の道論には二つのアプローチがあるということであった。経済学的アプローチと社会学的・政治学的アプローチである。数の上から言えば経済学的アプローチのものが圧倒的に多い。これに対して社会学的・政治学的アプローチは少数であり、したがって内容面で経済学的アプローチのものほどバラエティに富んではない。

社会学的・政治学的アプローチを採る第三の道の議論はグッド・ソサエティ

---

3) 邦語の文献としては東條〔20〕、菊池〔16〕、大野〔17〕がある。〔20〕は市民社会論の立場から市場経済・民主主義・福祉社会の統合形態としての新しい市民社会を展望したものであり、〔16〕は政治学の立場からアメリカのコミュニタリアニズムを概説したものであり、〔17〕はブレア (T.Blair) やギデンズらの第三の道におけるコミュニティの役割について、コミュニティニズムの影響に触れながら、検討したものである。

論の体裁をとっている。つまりグッド・ソサエティ論の中で第三の道が主張されているのである。前述のリップマン説は政治学的アプローチを採るグッド・ソサエティ論である。他方1990年代以降に登場した社会学的アプローチを採るグッド・ソサエティ論の中で第三の道を主張したのはエツィオーニ (A.Etzioni) である (前記文献リストの2, 8, 10)。また、ギデンズ (A.Giddens) の第三の道論 (前記文献リストの4, 7) も、グッド・ソサエティのコンセプトを前面に打ち出しているのではないが、内容的に見てエツィオーニ説と同様のカテゴリーに分類してよいであろう<sup>4)</sup>。本稿ではエツィオーニ説をギデンズ説および経済学サイドから社会の問題を取り入れたレプケ (W.Röpke) 説と比較しながら検討し、その特徴を浮かび上がらせてみたい。

## II. エツィオーニ説

1990年代はシステム革命の時代であった<sup>5)</sup>。東欧革命とソ連の解体によってロシア・中欧・東欧では誘導資本主義へのシステム移行が生じ、それと連動する形で市場経済のグローバル化が進行した。このような地球規模の大変化の中で1990年代のアメリカでは市場原理主義やミーイズムがますます勢いを増し、その結果、貧富格差の拡大、道徳低下、犯罪増加、個人の内向化、連帯意識の希薄化などの社会問題が一段と深刻化した。エツィオーニのグッド・ソサエティ論はこのような難問を解決し、よりよい社会を実現しようとする意図をもって展開されたものである。現代アメリカを対象にした社会改革論と言ってよいだろう。

### 1. グッド・ソサエティ

グッド・ソサエティとは何か。これに対するエツィオーニの回答は明快である。その箇所を引用すると「グッド・ソサエティとは、人々が互いに他を単に道具としてでなく、むしろ目的として扱う社会である<sup>6)</sup>」という定義が与えられている。

4) ギデンズ説については福田〔8〕を参照されたい。

5) 筆者は東欧革命とソ連解体を政治および経済のシステム革命と捉えた。くわしくは福田〔5〕pp.153-158を参照されたい。

6) Etzioni〔4〕邦訳p.22.

それは個々人が利用されたり、操作されたりするのではなく、尊敬と尊厳が与えられる社会であって、そこでは人々が互いを単なる労働者、取引相手、消費者、同胞市民としてではなく、コミュニティ —つまり大きく拡大された家族— の成員として扱う、うちとけた世界であると言う。

エツィオーニは、彼が師事した哲学者のブーバー（M.Buber）の言葉を使って、人々が他者を目的として扱う関係を「我—汝」（I—thou）<sup>7)</sup> 関係と規定し、それが十全に実現される社会こそがグッド・ソサエティだとする。ただし、このようなグッド・ソサエティは現実ではなく、理想であることに注意しておかなければならない。エツィオーニによれば「グッド・ソサエティはひとつの理想である。われわれはそれに完全に到達しうるものではないが、それはわれわれの努力を導き、またわれわれはそれによってわれわれの進歩を計測できるのである」<sup>8)</sup>。グッド・ソサエティは現代のアメリカ社会ではなく、この国の人々がその実現に向けて不断に努力すべきいわば永遠の目標と言うのである。このことからエツィオーニは不断にベター、ベターを追求する漸進的改良主義の立場をとっていることが分かる。

エツィオーニは他方で、グッド・ソサエティはもっぱら「我—汝」関係のみで成り立つ社会ではなく、「我—汝」関係のほかに「道具的な「我—それ」という関係の不可避性と、その重要な役割を認める」<sup>9)</sup> 社会であるとも言う。つまり、「我—汝」関係と「我—それ」（I—it）関係が並存する社会というのである。「我—それ」関係とは人々が互いを手段（道具）として扱う関係である。エツィオーニによればこの関係が支配する領域は市場であるが、国家と市民の関係も「我—それ」になりがちだ<sup>10)</sup>と言う。

「我—汝」関係と「我—それ」関係は矛盾対立する社会原理である。両者をどのように両立させるのか。これについてエツィオーニは「二つの、またはそ

7) Etzioni [4] 邦訳p.22.

8) Etzioni [3] p.13.

9) Etzioni [4] 邦訳p.22.

10) Etzioni [4] 邦訳p.28.

れ以上のアプローチを思慮分別をもって均衡させることによって、ある部分では整合しない複数の原理を総合する<sup>11)</sup>という方法を探ればよいと述べ、それを中道主義的コミュニタリアンのアプローチと呼ぶ<sup>12)</sup>。こうしてグッド・ソサエティは「国家と市場とコミュニティを均衡させる<sup>13)</sup>」のであり、したがってこれら三つのセクターが互いに協力したり、抑制したりすることがグッド・ソサエティにとって本質的であると言うのである。

## 2. コミュニティ

グッド・ソサエティの中核をなすのはコミュニティであるが、それはよく使われるマッキーヴァー (R.M. MacIver) 流のコミュニティ、つまり地域性と共同体感情を基礎とする地域共同体に限定されるのではない。「コミュニティとは人間関係の属性の集まりであって、どこか具体的な場所を意味するものではない<sup>14)</sup>」のであって、「およそ社会的実体であれば村から各国の国民 (夫婦, 家族, 趣味サークル, 世界全体) までのあらゆる集団を含む<sup>15)</sup>」ものである。地縁に基づく地域共同体のほかに、血縁に基づく家族さらには目的縁に基づく社会—つまりマッキーヴァー言うところの共同の関心・利益に基づくアソシエーション (自発的結社)—をも含む集団のすべてがエツイオーニの言うコミュニティなのである。そうであれば国家 (政府) もコミュニティということになるだろう。企業はどうか。エツイオーニは企業についてくわしく述べてはいないが、職場をコミュニティとして<sup>16)</sup>いることからして (職場イコール企業ではないのであるが) 企業もコミュニティに含めているのであろう。

エツイオーニによればコミュニティの存立はいかにして社会の秩序と個人の

11) Etzioni [4] 邦訳p.23.

12) Etzioni [4] 邦訳p.23.

13) Etzioni [4] 邦訳p.23.別の箇所では次のように言われている。「グッド・ソサエティは三つの—しばしば部分的に両立しえない—要素つまり国家, 市場, コミュニティのバランスをとる社会である」。Etzioni [3] p.12.

14) Etzioni [2] 邦訳p.21.

15) Etzioni [2] 邦訳p.21.

16) Etzioni [2] 邦訳p.243.

自律のバランスをとるにかかっている<sup>17)</sup>。秩序が欠けるとアナーキーになり、自律が欠けると権威主義や集産主義に陥るであろうから、両者のバランスをとることが不可欠となる。どのようにバランス化させるのか。言われているのは「社会に対してあなたの自律を尊重し支持してほしいと願うように、社会の道德秩序を尊重し支持しなさい<sup>18)</sup>」という一般的な行動原理としての新黄金律 (new golden rule) である。コミュニティ・メンバーが所属コミュニティの共有価値 (たとえば生命、健康、安全、平和、環境など) に基礎を置く道德秩序に献身する (commit) という形で責任—たとえば納税の義務—を果たすことによって、社会的サービスの受給という権利を行使しようと言うのであろう。道德秩序への献身はできる限りコミュニティ・メンバー相互間の道徳的説得によって実現し、それが不可能となったときにはじめて法律による強制によって実現することが望ましいと考えられている。要するに「権利は責任を前提とする<sup>19)</sup>」というのがエツィオーニの考えなのである。

エツィオーニは国民社会のような全体社会を無数といってよいほどの多種多様なコミュニティの集合として捉え、それを諸コミュニティのコミュニティ (a community of communities)<sup>20)</sup> と名づける。この場合問題となるのはこのコミュニティをどのように秩序づけるかである。各コミュニティの団結とその内部でのメンバーのアイデンティティを促進しようとする、他のコミュニティとの対立を生み、国民統合を阻害するといういわゆるアイデンティティ・ポリティックの問題が生じ、全体社会の秩序維持が困難に陥るリスクが高まる。エツィオーニはそれを防ぐ具体的方法として道徳対話を提案する。つまり、各コミュニティ相互間および上下間における道徳対話である<sup>21)</sup>。各コミュニティ相互間では対話によってそれらに共通する道徳的価値を確認し、そのことを通して連帯意識を醸成し、上下間では対話と説得を通してより広い包括的コミュニティへの献身

17) Etzioni [2] 邦訳pp. 26, 66-68.

18) Etzioni [2] 邦訳p.10.

19) Etzioni [4] 邦訳p.17.

20) Etzioni [2] 邦訳pp.188, 255, Etzioni [4] 邦訳p.162.

21) Etzioni [2] 邦訳p.152.

という忠誠心を養成するのである。さらに国民社会という全体枠組みを維持するためにはいくつかの要件が必要となるが、エツィオーニによれば民主主義、国民社会の指導理念（たとえば自由）を明文化した憲法と権利の章典、重層的な忠誠心、中立・寛容・尊敬の態度、複合性政治（各コミュニティのメンバーが他のコミュニティおよびより包括的コミュニティに対して同胞意識と忠誠心をもつようにすること）、社会全体にわたる対話、感情的対立・憤慨・憎悪を処理する方法としての和解をそのような要件として挙げている<sup>22)</sup>。

### 3. 第三の道

以上エツィオーニ説の中核を成すコミュニティについて筆者なりに整理してみたが、これでようやく第三の道に言及しうる準備が整った。2000年に出版されたエツィオーニの“*The Third Way to a Good Society*”が示すように、第三の道はグッド・ソサエティへの道である。彼自身の言葉を引用すると「第三の道はわれわれをグッド・ソサエティへと導く道である<sup>23)</sup>」。「我一汝」関係が十全に実現されるコミュニティ社会という理想に至る道のりだと言うのである。

では第三の道とは何なのか。筆者の理解では第三の道には三つの意味が込められている。第一はエツィオーニのスタンスにかかわる。アメリカにおける二大社会経済思想である国家依存のリベラリズムと自由放任を主張するリバタリアンの保守主義との間をゆく中道主義<sup>24)</sup>の立場である。第二はコミュニティの重視である。エツィオーニの思考枠組みは経済・国家・社会であり、より具体的には市場・国家・コミュニティであるが、これらのうちコミュニティを最重視する立場である。つまり市場原理主義ではなく、集産主義（国家主義）でもない、コミュニタリアニズムの立場である。第三は社会経済システムにかかわる。エツィオーニは「私が言及してきた新しい中道の方向性は第一の道（自由市場）と第二の道（指令統制経済、計画経済、社会主義）のどちらも選ばないことから「第三の道」

22) Etzioni [2] 邦訳pp.289-299.

23) Etzioni [3] p.13.

24) Etzioni [4] 邦訳p.12.

と呼ばれることがある<sup>25)</sup>と述べている。これは他者によって外から貼られたレッテルであるが、エツィオーニはそれをそのまま肯定しているようである。以下、社会経済システムに焦点を絞ってエツィオーニの第三の道を検討してみたい。

経済学的アプローチを採る第三の道論は市場と国家という二元的構図をとるものが大半であるが、その中で例外と言えるのはレブケの説である。それは市場・国家・社会という思考枠組みの中で社会による国家および市場の制御を問題にしたものであった<sup>26)</sup>。今を去る六十年も前の1940年代半ばのことである。社会を取り入れた説であるから社会経済システム論と規定しうるものであり、経済学的な第三の道論の中では個性あふれるユニークな説であると言ってよい。

エツィオーニの社会経済システムに関する思考枠組みは市場・国家・コミュニティのトリアードであることはすでに述べた。この限りでは、また社会経済システム論という点でも、エツィオーニ説はレブケ説と同じである。両者の違いは立論方法にある。エツィオーニ説が社会学的アプローチを採ることは既述の通りである。同じく社会学的アプローチを採るギデンズの第三の道論も、市場・国家・市民社会のトリアードを思考枠組とした社会経済システム論である<sup>27)</sup>。

先に触れたようにエツィオーニの第三の道は、彼自身の考えによれば、自由市場ではなく、また計画経済でもないものであった。彼が自由市場と計画経済をどのようにイメージしているか判然としないが、伝統的な経済システム論よりすれば両者は資源配分制度を基準にした経済システムの分類である。自由市場は自由放任の競争市場システム、計画経済は国家の指令的経済計画システムというのが弘通の見方である。エツィオーニがこのような見方に同意しているのであれば、彼の第三の道は両者の間をいくいわゆる混合経済ということになり、ごくありふれた没个性的な説になってしまう。筆者の見るところエツィオーニは経済学的な第三の道論に通暁しているようには思われぬ。もう一度言っておくと自由市場と計画経済という二分法は経済の領域に限られたものであり、

25) Etzioni [4] 邦訳p.18.

26) レブケ説については福田 [7] を参照されたい。

27) ギデンズ説については福田 [8] を参照されたい。



したがって狭い経済システム論のカテゴリーなのである。エツィオーニ説のユニークさはコミュニティを考察の枠組みの中に取り入れたところにある。自由市場でもなく計画経済でもない第三の道を打ち出すのであればより包括的な社会経済システムを提示すると言うべきであった。他者によって外から貼られたレッテルをそのまま肯定したのは不用意であった。先行研究に目を通しておくのが学者の作法というものであろう。

#### 4. 市場・国家・コミュニティ

エツィオーニは市場、国家、コミュニティの間の関係をどのように見ているのだろうか。まずコミュニティについてである。これについてエツィオーニは「市場も国家もともに健全な社会に依拠してこそ十全に機能する<sup>28)</sup>」と述べる。多種多様な無数のコミュニティの集合である社会が健全であることが何よりも肝要だというのはギデンズやレプケに通じる考えである。ギデンズも市民参加のアクティブな市民社会が構築されてはじめて市場はその本来の能力を発揮し、民主主義も円滑に機能しようと<sup>29)</sup>考え、レプケもまた社会が安定してこそ市場は有効かつ健全に機能しようと<sup>30)</sup>考えた。三人の学者は社会に対してスタビライザーとしての役割を与えようとしたのである。ギデンズとレプケはそれに加えて社会に対抗力 (countervailing power) としての役割を担わせようとした。ギデンズはアクティブな市民社会に「市場の力と政府の権力を制限する<sup>31)</sup>」という役割を、レプケも社会に国家権力および市場のパワーを制限するという役割を与えた<sup>32)</sup>。これに対してエツィオーニの場合は対抗力という考えは前面に出ていない。たしかに「市場は適切に制御されないと、人間性を奪い、地域コミュニティ、家族、社会関係を破壊してしまう<sup>33)</sup>」という指摘があり、市場コントロールの必要性に目が向けられているのではあるが、しかしそれをコミュニティに対抗力の形で

28) Etzioni [2] 邦訳p.205.

29) Giddens [15] p.45, 福田 [8] p.19.

30) Röpke [19] S.83, 邦訳p.64.

31) Giddens [15] p.45.

32) Zmirak [21] p.13, 福田 [11] p.8.

33) Etzioni [4] 邦訳p.126.

担わせるというふうには考えられていないのである。むしろエツィオーニの場合には市場、国家、コミュニティを対抗関係というよりも協力、パートナーシップおよび補完の形で捉えようとする意識の方が強く働いている<sup>34)</sup>。

そこで次に市場と国家、市場とコミュニティ、国家とコミュニティについて順にみておこう。まず市場と国家の関係であるが、市場は自由放任ではなく国家によって規制されると考えられている。要するに混合経済の擁護なのであるが、それを問題にするさいにもっとも重要な論点となるのは国家規制の具体的方法であるのだが、残念ながらこれについては何も述べられていない。ちなみにレプケは国家による市場整合的干渉（marktkonformer Eingriff）—つまり市場価格メカニズムを阻害しないような規制—を主張したのだが、エツィオーニにはこれに類するような提案は何もない。ギデンズの場合も同様である。社会学的アプローチを採る社会経済システム論（つまりグッド・ソサエティ論）の最大の弱点と言えるであろう。エツィオーニは国家の政策（公共政策、社会政策、人的投資政策、環境政策など）についてもかなりのページを割いているが<sup>35)</sup>、それとても例示の域を出るものではないし、目新しい提案があるわけでもない。

次に市場とコミュニティの関係であるが、これは補完の形で論じられている。つまり市場が供給しえない財やサービスをコミュニティが引き受けるのである。具体的にはNPOやそのほかの非営利団体や自発的結社などが互惠の原則で福祉や教育や防犯などに従事するということなのだが、これらについてもありきたりのことが言われているだけで目新しい提案は何もない。

最後に国家とコミュニティの関係であるが、これもパートナーシップの形で論じられている。つまり国家とコミュニティがともに役割を分担しあって福祉を担うべきであるという提案である。もっとも役割分担の比重は国家にかかって

34) Etzioni [4] 邦訳pp.24,32,Etzioni [3] p.4.

35) 福田 [8] を参照されたい。

36) Etzioni [2] 邦訳第5章。ちなみにギデンズは‘welfare to work’を担う社会的投資国家の役割を重視している。つまり、貧困層に対して技能教育や職業教育を施し、公共空間や労働への参加を促進する国家である。Giddens [14] 邦訳pp.197,195-204.

おり、コミュニティは「政府が果たす役割のほんの一部しか引き受けられない<sup>37)</sup>」  
 のであり、福祉国家という大枠の中で消防、防犯、相互扶助、学校支援、公園  
 整備などを受け持つにすぎないのである。ギデンズが旧来の福祉国家路線と新  
 自由主義のミニマム・セーフティネットの道とともに退け、「権利と責任の結合」  
 と「市民参加」と「リスク・テイキング」を行動原理とするポジティブ・ウエ  
 ルフェア社会の構想を打ち出し、福祉国家から福祉社会への道を展望したのに  
 比べると<sup>38)</sup>、エツィオーニの提案は保守的であり、福祉国家の枠内での微温的改  
 良に留まっている。

エツィオーニは「市場と国家とコミュニティを均衡化させる」ことをグッド・  
 ソサエティの、したがって社会経済システムの、最重要課題と見ているが、筆  
 者が検討した限りでは、均衡化の具体的方法については正面から論じていない。  
 上に見たように市場、国家、コミュニティ相互間の関係についての説明はある  
 のだが、どのようにして三者のバランスをとるかに関する方法論は明言されて  
 いないのである。バランス問題を考える上でポイントになるのは市場の破壊力  
 である。市場による社会の破壊については、たとえばポラニー (K.Polanyi) やレ  
 ブケやリュストウ (A.Rüstow) らが<sup>39)</sup>つとに警鐘を鳴らしたところである。中でも  
 レブケは警鐘に止まらず市場の破壊力を抑制する具体的方法を提言した。国家  
 と社会による市場の囲い込みである。エツィオーニは市場の破壊力を十分認識  
 しているのだが、残念ながらその抑制方法については何も論じていない。ギデ  
 ンズの場合には国家と社会による市場の囲い込みが提案されてはいるが、レブ  
 ケ説ほど具体的ではない。市場の破壊力に対する抑制方法を提示しない限り、  
 市場・国家・コミュニティの均衡問題は解決できないであろう。

##### 5. 社会のダイナミックス

エツィオーニ説の検討の締めくくりとして最後に、社会に関するダイナミッ  
 クスについて触れておこう。経済学的アプローチおよび社会学的・政治学的ア

37) Etzioni [2] 邦訳p.217.

38) 福田 [8] pp.16-18を参照されたい。

39) 福田 [6], 福田 [9]を参照されたい。

アプローチを問わずこれまでの第三の道論に欠けていたのはシステム・ダイナミックスであった。エツィオーニ説はこの点に言及しており、その限りでユニークだと言える。もっともその説明は体系的でなく、むしろ断片的と言えるものであるから、論理の筋道を筆者の解釈で補いながら誤解を恐れず述べてみようと思う。

社会のダイナミックスに関するエツィオーニ説のキーワードは、自律と秩序、逆転共生 (inverting Symbiosis) , 超安定 (metastability) である<sup>40)</sup>。エツィオーニによれば社会変動は自律と秩序の二項運動として捉えられる。この場合の社会はおそらく諸コミュニティのコミュニティ、つまり国民社会なのであろう。したがって部分社会 (コミュニティ) や国家を含むことになる。市場はどうであろうか。市場に関する説明がないのでそれが市場価格メカニズムなのか市場社会なのか判然としないところがあるが、文脈からして後者であろうから市場もまた含まれることになる。社会変動は自律と秩序の振り子運動の形をとる。エツィオーニの言葉を使えば逆転共生である。秩序か自律のいずれか一方が優勢になると、他方もそれに応じて強くなり、やがてより高められたレベルで両者は均衡する、つまり共生するようになるが、それを超えて一方がさらに優勢になると、他方は弱体化し、両者が反目するように転換するというサイクルを繰り返す運動である<sup>41)</sup>。たとえば秩序が過度に強くなると自律を圧迫し、両者は敵対するが、やがて自律の力が強くなって両者が育てあい相互に高めあうレベルへと社会が移行していくという運動である。ただエツィオーニはこのような社会変動は一定の枠内で展開されると考えているようである。このことを説明するために超安定のコンセプトが持ち出されているように思われる。「社会は変動というボールを社会という器の枠内にとどめるためにその基本型を維持したままで特定の部分だけを変えることができる<sup>42)</sup>」というのが超安定にほかならない。つまり、社会は全体としてのパターンを維持したままで繰り返し自己修正をする能力を有す

40) Etzioni [2] 邦訳pp.46-47, 66-68, 77-78,88,98.

41) Etzioni [2] 邦訳p.66.

42) Etzioni [2] 邦訳p.78.

ると言うのである。この論理からすれば社会は自律が極度に抑圧された集産主義にも、自律が圧倒的に支配するアナキーにも陥らないということになる。両極に至る前に秩序または自律が反転攻勢をかけ、両者のバランスをとるようになる。このようなサイクル運動を長期にわたって繰り返しながら社会は一步一步階段を昇るようにしてグッド・ソサエティの理想型に向かっていくと言うのであろう。

エツィオーニの社会変動論は、彼自身が示唆しているように、<sup>43)</sup> 歴史縦断的に、かつ地球的規模で妥当するものではなく、建国以来一度として政治・経済・社会システムの大転換を経験したことのないアメリカ社会に限定されたものである。したがっていわゆる革命や敗戦によるシステム革命—たとえば明治革命、ロシア革命、中国革命、東欧革命、ソ連解体など—は想定されていないのである。社会の超安定機能が説かれるゆえんである。

### Ⅲ.おわりに

1990年代は歴史の転換期であった。この時期に三つのグローバリゼーションが同時進行した。技術面でIT革命がグローバルに波及し、経済の分野でロシア・中欧・東欧におけるシステム革命および中国の市場経済への移行などによって市場経済のグローバリゼーションが一気に加速し、社会の領域で市場経済の破壊作用に対抗する市民運動がグローバル化した。「草の根のグローバリゼーション」(grass-roots globalization)と呼ばれるこの対抗運動はサイバー・スペースの媒介によって結ばれた地球市民 (planetary citizen) によって担われ、中でもNGOやNPOや非営利的アソシエーションなどがグローバル企業や機関投資家の行動を監視するかたわら、環境破壊、南北間の所得格差の拡大、貧困拡大などに対して異議申し立てしたり、それらの解決のために積極的に提言したり、行動したりするようになった。

1990年代以降に登場したグッド・ソサエティ論のほとんどはこのようなグローバリゼーションに伴うグローバル・レベルおよび国民国家レベルでの社会経済

43) Etzioni [2] 邦訳pp.68,106

システムの動揺や不安定化，それに伴う種々の社会問題の深刻化を視野に入れている。たとえばガルブレイス（J.K.Galbraith）やベラー（R.N.Bellah）らは経済，政治，社会，宗教，道徳，環境，国際関係などを視野に入れ，アメリカ社会が抱える諸問題の解決に資するシステム改革の方向を示そうとした。エツィオーニも「グローバルな経済的諸要因の遠心的効果，それへの対応策，社会秩序とくにその道徳的基盤が近い将来問題となる<sup>45)</sup>」と述べ，グローバリゼーションにかかわる問題解決の必要を視野に入れている。ただ残念ながら彼のコミュニティ論ではこの問題に対する解決策は正面から論じられないままに終わっている。ギデンズの第三の道論にもグローバリゼーション問題を積極的に取り入れた論理展開はない。

筆者はかねてより，向後の第三の道論はグローバリゼーション問題を視野に入れたシステム・ダイナミックスの形をとるべきであると主張してきた<sup>46)</sup>。一言で述べると，ポラニー流の二項対立的システム運動の論理を援用しながら現代の社会経済システムの変動を「グローバル市場の自己貫徹対グローバル市民社会の自己防衛」の形で捉え，それを踏まえて新しい第三の道を提示すべきであるという主張である。このようなシステム・ダイナミックスの方が，エツィオーニ流のアメリカ社会に限定された「秩序と自律の振り子運動」の論理よりも，現代のグローバリゼーション問題や社会経済システムの変動をよりの確かつより説得的に把握しうるであろう。

#### 参考文献

- [1] Bellah,R.N.,et al.,*The Good Society*,New York,1991.中村圭志訳『善い社会—道徳的エコロジーの制度論』みすず書房，2000年。
- [2] Etzioni,A.,*The Golden Rule:Community and Morality in a Democratic Society*,New York,1996.永安幸正監訳『新しい黄金律—「善き社会」を実現するためのコミュニタリアン宣言』麗澤大学出版会，2001年。

44) Galbraith [13] , Bellah [1]

45) Etzioni [2] p.125.

46) 福田 [10] , 福田 [11] を参照されたい。

- [ 3 ] Etzioni,A.,*The Third Way to a Good Society*,London,2000.
- [ 4 ] Etzioni,A.,*Next:The Road to the Good Society*,New York,2001.小林正弥監訳『ネクストー善き社会への道』麗澤大学出版会, 2005年。
- [ 5 ] 福田敏浩『体制移行の経済学—理論と政策』晃洋書房, 2001年。
- [ 6 ] 福田敏浩「ドイツ新自由主義の第3の道—レッセ・フェールと集産主義を超えて(1)」『彦根論叢』第333号, 2001年, pp.25-41。
- [ 7 ] 福田敏浩「ドイツ新自由主義の第3の道—レッセ・フェールと集産主義を超えて(2)」『彦根論叢』第335号, 2002年, pp.1-28。
- [ 8 ] 福田敏浩「「第3の道」の時代—グッド・ソサエティを求めて」『彦根論叢』第337号, 2002年, pp.1-24。
- [ 9 ] 福田敏浩「新しい社会経済体制を求めて—第三の道の設計枠組」『京都学園大学経済学部論集』第12巻第2号, 2002年, pp.29-52。
- [10] 福田敏浩「新しい第三の道を求めて—社会経済システム論の思考枠組」『彦根論叢』第348号, 2004年, pp.29-46。
- [11] 福田敏浩「新しい社会経済システムを求めて—「第三の道」論の系譜」経済社会学会編『経済社会学会年報』XXI, 2004年, pp.4-11。
- [12] 福田敏浩「第三の道とグッド・ソサエティ—規範的社会経済体制論の系譜」『彦根論叢』第354号, 2005年, pp.1-18。
- [13] Galbraith,J.K.,*The Good Society:The Humane Agenda*,New York,1996. 堺屋太一監訳『よい世の中』日本能率協会マネジメントセンター, 1998年。
- [14] Giddens,A.,*The Third Way:The Renewal of Social Democracy*, London, 1998.佐和隆光訳『第三の道—効率と公正の新たな同盟』日本経済新聞社, 1999年。
- [15] Giddens,A.,*The Third Way and its Critics*,Cambridge,2000.
- [16] 菊池理夫『現代のコミュニタリアニズムと「第三の道」』風光社, 2004年。
- [17] 大野正英「「第三の道」におけるコミュニティの役割」経済社会学会編『経済社会学会年報』XXI,現代書館, 2004年。
- [18] Parker,J.,*Citizenship, Work and Welfare:Searching for the Good Society*, London, 1998.
- [19] Röpke,W.,*Civitas humana,Grundlagen der Gesellschafts-und Wirtschaftsreform*, 4.Aufl.,1979.喜多村浩訳『ヒューマニズムの経済学』勁草書房, 1952年。
- [20] 東條隆進『よい社会とは何か』成文堂, 2004年。
- [21] Zmirak,J.,*Wilhelm Röpke,Swiss Localist, Global Economist*,Wilmington,2001.